



荒谷 頂（あらや たかし）

生年月日：昭和34年秋田県出身

略歴：昭和57年東京理科大卒、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依頼退職（1等陸佐）。

海外留学：ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。

平成21年9月～30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。

平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会：熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める

著書：『戦う者たちへ』『サムライ精神を復活せよ』『特殊部隊vs.精銳部隊—最強を目指せ』並木書房／『自分を強くする動じない力』三笠書房／『日本の特殊部隊をつくったふたりの「異端」自衛官一人は何のために戦うのか！』ワニプラス

熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス

<https://musubinosato.jp/>



るものが世界を支配する』として、米国のモンロー主義（不干渉政策）を非難し放棄させた。リムラントとは、ロシアを取り巻く中国（J・ケナンは日本とした）、インド、イラン、東欧諸国等だ（図参照）。このリムラント諸国との連携を分断し、米国の影響下に置き、ロシアとは連携させないという考え方であり、いわゆる対ソ（対露）封じ込め政策となって実現する。冷戦構造は、こうした英米の戦略によって作られた構造であり、ソ連が鉄のカーテンを引いたのではない。

歴史は、戦前までさかのぼるが、「俺のものは当然俺のもの。人のものも俺が欲しいと思ったら俺のもの」という米英の帝国主義的アジア政策に対し、異を唱え戦いを挑んだのが日本である。

戦前の日本の対英米認識を紹介しよう。「そもそも世界各国がそれぞれその所を得、互いに頼り合い助け合ってすべての国家がともに栄える喜びをともにすることは、世界平和確立の根本です。しかし米英は、自国の繁栄のためには、他の国や民族を抑圧し、特に大東亜に対しても飽くなき侵略と搾取を行い、大東亜を隸属化する野望をむきだしにしついには大東亜の安定を根底から覆（くつがえ）そうとしました。大東亜戦争の原因はここにあります。大東亜の各國は、互いに提携して大東亜戦争を戦い抜き、大東亜諸国を米英の手かせ足かせから解放し、その自存自衛を確保し、次の綱領にもとづいて大東亜を建設し、これによって世界の平和の確立に寄与することを期待しています。これが、日本、中国（南京国民党政府）、タイ、ビルマ、インド、フィリピン、満州が共同で打ち立てた「大東亜共同宣言」である。そして5つの原則が謳われた。

第一「共存共栄の原則」。大東亜の各國は、地理的、経済的、物価的必然から言って、その固有の理念からすれば共存共栄の実を擧げるべきはずであった。しかし、米英の毒手により大東亜を個々に分割し、長く横の連絡を取りぬようにし、米英のあらゆる妨害にもかかわらず我が国が強大となるや、大東亜の諸国をしてわが国を憎悪、敵対せしめる如く仕向かた。

これに対し、日本は、植民地から解放した大東亜の国々とともに、米英のような利己独裁的のものではなく、大東亜固有の道義に基づいた共存共栄、

相互共済の本義による秩序を打ち立てるというのである。

第二「独立親和の原則」。米英は、日本の孤立を企んで、彼らの最も恐れる日支の結合を極力破壊せんとした。そこで、第一に日支の離間の為排日運動の扇動拡大に狂奔した。第二に日支衝突に向け蒋介石の俳日運動にあらゆる援助と便宜を与え抗日運動にまで推し進め支那事変を勃発させた。第三に支那事変を拡大永続させ日本の国力を消耗させるとともに、支那を破壊し米英の力に依存させることによって自らの野望を達せんとした。

隣保親和の為には、大東亜の国々が相互にその自主独立を尊重しなければならない。大東亜戦争により、米英が独立を奪い利己的搾取の犠牲とした諸国を解放し、弱小国を軽蔑し劣等視する態度を改め、相互の間に聊かの軽蔑も追従もないおのずからなる親和を基調とする新しい世界を生もうというのである。

第三「文化高揚の原則」。米英は、その経済的侵略手段として先ず文化侵略を行い、自國流の文化を強制してその国の伝統文化を失わせ、ひたすら従順性と隸属性を養い、その国民を去勢しようと試みた。

世界人類の文化は絶えず向上しなければならぬ。一国の文化が全国民の特性発揮によって合成されるように、人類文化の向上進歩は世界各国文化の合流によって起こるものである。政治・経済が独立してもその固有の文化が確立されない以上完全なる独立とは言えない。大東亜各國から米英文化の残骸を払拭し固有文化を創造発展することにより、大東亜の文化は世界文化の進歩に寄与するに至るのである。

第四「経済繁栄の原則」。米英資本主義の支配下では、その国の経済機構は米英の市場たるに好都合のように造られ、一方では米英に必要な原料の清算のみを旨とし、他方では総ての生活必需品が米英の監督下に置かれるという風に仕組まれ、生存のためには米英への従属を余儀なくしてきた。

大東亜の互恵的交易は、米英の利己独占的貿易とは本質的に異なる。いずれの国にも、地理的気候的特性や鉱物資源等天恵的に決定されたものもあり、国民の技術や文化経験から生まれた特性など、自然夫々の経済的特性があら

した。「日本の秩序は家族的秩序であって、家の延長に国家があり、家族を拡大したのが日本民族である。この和の心は受容の性質を帯び排他性を持たない。ゆえに、家の幸福な生活と豊かさを東亜の国々に広め、世界に広めることを是とする。これに対し、米英の家庭に対する観念がそうである如く世界観においても家族的秩序を全面否定する。彼らの為すところを放置しておいては我々の家庭的秩序そのものを破壊される。我々は、家族的秩序を破壊せんとする米英を徹底的に破碎し彼らの思想を絶滅せねばならぬ。彼らに対しては和の精神の甘さに陥らず、米英を撃滅し世界に家の秩序を広めるのが使命である」。

戦前、日本が目指したのは、「各の政体は各国の拵ぶところを尊重し差別や干渉をしない地域的共存圏を確立する諸共存圏の相互の協和関係に基づく新たな世界秩序」であった。そして、それを国民一丸となって行動できたのは、「人間は、宇宙・自然の道理に生命活動を歸一すれば天壤無窮に栄え、反すれば消滅する。人間が存続するには、天道を全うする以外に道はない。日本の秩序は天道による。日本人は、自らの生命を天道に歸一し永遠の生命たるを自覚して力を尽くすことをよしとする。正義を全うするにはこれを実行する信念と気魄が必要である。あらゆる障害を破碎して、健全なる正義の秩序をこの世に実現する。日本人は、万難不屈の大和魂で正しき世を目指して力を尽くすのみ」という信念と気魄であった。



スパイクマン（米）の geopolitics

国家はパワーポリティクスに専念すべき。ハートランドの拡大を防ぐためにはリムラントへの介入が不可欠である。スパイクマンの主張は、アメリカが戦後、孤立主義から、封じ込め政策に代表される介入主義へと、政策の舵を切る理論的基盤となった。